

対話を通して
宇治・久御山の今、
そして未来を考える。

対談スペシャル

1 久御山在住 A子さん

「出産・育児は1人ではできない」

田中 Aさんは、1才のお子さんを育てておられますが、出産・育児の体験を聞かせていただけますか？

A子さん 出産という一大イベントを終えた後、可愛い赤ちゃんに接する楽しみの中に、不安や心配も募ります。ノンストップ育児で、産後2週間位には疲れがピーク。体調不良も重なり産後3ヶ月位までは心も体も安定しませんでした。



A子さん
久御山在住、
1歳児の母
慣れない育児に
奮闘中

田中 ストレスや心の疲れは、自分ではなかなか気づきにくいもの。つい、がんばりすぎてしまうんですね。

A子さん そうですね、産後クライシスの一歩手前だったのかもしれない。不安でいっぱいでした。産後の体を休めながら赤ちゃんのお世話をするために、まわりのサポートを受けることが必要なんです。

田中 世帯の約8割は「核家族」。日常的に育児をサポートしてくれる祖父母もいないし、地域とのつながりも薄い。母親は気軽に相談できる相手もなく、孤独になりがちですね。

A子さん そんな中、子育て誌でつどいの広場事業を知り、ママ友との交流を始める事が出来ました。

育児の問題にしても「ワンオペ」というのは、様々なリスクを呼ぶ可能性がありますね。地域社会全体で子育て家族を支えていく。こういった寄り添いが大切ですね。合せて保健師さんだけではなく、今後は助産師さんとの連携が必要となってくるでしょうね！

MIKKO's Voice

2 弁護士 橋本弥江子さん

「仕事と家庭の両立は難しい？」

田中 女性が一生続けられる仕事に就きたいという思いから弁護士となりご活躍の橋本さんですが、育児休暇を終えられ職場復帰をされている中でのご苦労をお聞かせください。

橋本さん 仕事と家庭(育児)の両立を目指し、産前・産後休業を取得の他、労働時間の短縮措置で保育園へのお迎えが可能になっています。しかし一番慌てるのは、子どもの急病時の対応ですね。

田中 そのような場面になった際、どのようになさっていますか？

橋本さん 家族や実家が頼りですが、都合が悪ければやはりスケジュール変更等をお願いすることになり、その事が仕事に対する責任感との狭間で強いストレスになったりすることもあります。

田中 そうですね。キャリアを継続する為の事業所内保育や病児保育の充実の他、社会全体でママを支えるシステムだけでは解決しないマインドセットの環境整備も必要とされていますね。

橋本さん ワーキングママは時間的な制約を受けることから、労働量に対する達成感を得にくいことがあげられます。職場と



橋本弥江子
女性が一生
続けられる仕事
として弁護士を
目指しました。

家庭両方において、一定時間で仕事を切り上げざるを得ない環境は職場でも家庭でも「十分に仕事をしていない」という感覚を持ち込みがちなんです。

一億総活躍の「輝く女性」の像を見ながら、「自分は、そんな風にはできていない」という思いを持ってしまいう循環を断つ働きかけが必要ですね。省察する時間を提供したり、他者と共有し客観視できるような研修、たとえば「マインドフルネス」等の取り組みも考えられますね。これからの橋本さんの活躍を楽しみにしています。

MIKKO's Voice

3 保護司 松井芳子さん

「誰もが安心して暮らせる 本当の支援のカタチ」

田中 松井芳子さんは長きに渡り、保護司としてご活躍ですが、2017年秋、更生保護功労で瑞宝双光章の叙勲を受けられました。感想をお聞かせ下さい。

松井さん 叙勲の知らせを受けた時、今まで関わってきた沢山の方々のお顔が思い浮かびました。保護司として活動するには「まず相手を受け入れる。」ということを中心に心がけてきました。たくさんの方々との出会いの積み重ねが叙勲に繋がったという思いでした。

田中 私が市議員として障害者福祉を勉強中に松井さんとの出会いがありました。松井さんは手話通訳者でもあり、福祉に関わられてこれらの中で感じられている事を教えてくださいませんか？

松井さん 近所で出会った女性は聴覚に障害があり、その方と何とかコミュニケーションをとりたいとの思いから手話を勉強し始め今に至ります。支援を必要とする人に寄り添いながら、誰もが安心して暮らせる本当の支援が可能になる為には何が必要であるのか、社会の構造の変化に合わせて考えていかなければならないと考えています。



松井芳子
保護司

田中 ご自身は102歳で要介護2、下肢・聴覚に障害のあるお母さまを介護されていると思いますが、どのような事を感じていらっしゃいますか？

松井さん 我が家も例外に漏れず老々介護の状況ですが、ダブルケアをされている方、持病がありながら家族に介護が必要な状況にある方、病気の治療を続けながら介護されている方がおられる現実を目にすると、個別の支援ではなく様々な状況の方々に対応できる支援が必要であると感じています。

ご自身も色々ご苦労があると思いますが、回りの方々に寄り添う温かい眼差しにいつも感服しております。これからますます高齢化が進む社会では、人材不足がもう目の前にせまっているので、総合的に支援を提供できる複合的な支援の体制が必要とされていますね。

MIKKO's Voice

4 介護者家族の会の方々

代表世話人：中野正子氏・渉外担当：長谷川笑子氏・総務担当：坂本文子氏

田中 介護者家族の会は、人や社会に尽くした人をたたえる第49回「社会貢献者表彰」公益財団法人社会貢献支援財団で、日本財団賞を受賞されましたが、これまでのご苦労など感想をお聞かせください。

介護者家族の会の方々 これまで、介護者(家族)への「心のケア」を目指して、三十余年に渡り皆様に寄り添った活動をすすめてまいりました。介護をする日常の中で皆様と繋がっているという思いが、心の支えとなって続けることができました。これからも

息の長い活動を目指して皆様に寄り添った活動をしていきたいという思いを更に強くなりました。

介護者家族の会
福祉向上をめざし
介護者同志の
交流・親睦を
目的とする会



「これからの介護・福祉支援制度のあり方」

田中 2025年問題が象徴するように超高齢社会を迎えることとなりますが、今後は担い手不足が大変重要な課題となっています。介護者家族の会では以前から、病院と在宅連携強化を提示されておられますが、介護・福祉支援制度について何かお考えをお聞かせ下さい。

介護者家族の会の方々 福祉のサービスをニーズに応じて、例えば「グリーンケア」(近い人と死別した人が悲嘆(グリーフ)から立ち直る過程を支援する取り組み)も連携して受けられる仕組みができるといいですね。

日常の暮らしの中で必要とされる様々な支援を、地域の皆で支え合いながら、役割を持ってコミュニティを育てることを目指す社会の実現が望まれていますね。ダブルケア等、高齢者・障害者・子どもに寄り添った複合的な福祉サービスを拠点整備し、相互利用して活用できる仕組みの構築が必要であると感じています。これからも介護者家族の会の皆様とともに活動してまいりたいと思います。

MIKKO's Voice

対談を抜粋して掲載しています。